## 深い学びのために

### 学習のポイントの解答例

**1** **前半の段落において、作者の心情はどのように移り変わっているか、まとめてみよう。**

**【答】** まず、入京を果たした「うれしさ」が述べられている。次に、家を見て、想像以上に荒れていることに、言いようもないほど「ひどい」ことだと嘆いている。そして、家を預けた隣家を「薄情だ」と思いながらも、お礼はきちんとしようと考えている。

**▼ポイント▲** 「うれし」「言ふかひなし」「つらし」などの心情を表す形容詞をポイントにして、その心情をもたらすものが何であるかを考えながらまとめていく。

**2** **「ほとりに松もありき。」（七九・7）とあるが、「松」と「生まれしも」、「見し人の」の二首の歌はどのように関連しているか、説明してみよう。**

**【答】** 初めの歌には「小松」が出てくる。もちろん「小」には「子」が掛けられており、そこから「亡き子」を連想させるようになっている。また、新しく生えてきたことが生命の誕生ということで、対比的に子供の死が意識されることになる。二番目の歌には「松の千年」という言葉がある。「松」は常緑であることから生命力の象徴として捉えられている。ここにも短命で亡くなった自分の子供と長寿を予想させる「松」との対比が見られる。「松」と「亡き子」とを重ねることにより実景の「松」と歌とを結び付けている。

**▼ポイント▲** 「松」と二首の歌との関わりを考えるのであるから、歌の中に「松」がどのように扱われているかを考える。「小松」と「松の千年」のそれぞれの言葉に着目する。そうするとそれが両語とも「亡き子」と結び付くことが分かるので、それについて説明することになる。二首目の歌は内容がとりにくい部分があるので、言葉を補いながら解釈し、検討する必要がある。

## 言葉と表現の解答例

**1** **次の各部は下の部分とどのような関係で続いているか、説明してみよう。**

**(1)** **中垣こそあれ（七九・4）**

**(2)** **見し人の松の千年に見ましかば（八〇・1）**

**【答】** (1) 逆接。「こそ～結び」が切れずに下に続く場合、逆接となる。

(2) 反実仮想。「まし」という助動詞が反実仮想の意味があり、下の「まし」と対応している。

**▼ポイント▲** (1)は係り結びが成立しているにもかかわらず、文が終止せず、下に続いていく特別な用法であることから考える。

⑵は「～ましかば～まし」の典型的な用法。

## 言語活動の解答例

**1**　**「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、疾く破りてむ。」（八〇・2～3）とあるが、この部分は、作品の冒頭部（七四ページ）とどのように対応しているのか、話し合ってみよう。**

**【答】**（意図）「土佐日記」の冒頭部と末尾の部分とを読んでいるので、両者を比較して、作者の作品全体への思いを読み取る。

（手順）

1　冒頭部から作品全体に関わりそうな部分を抜き出す。さらに、末尾の部分でも同様の作業を行う。

「門出」からは「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。」「そのよし、いささかにものに書きつく。」の部分を抜き出す。「帰京」からは「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。」「とまれかうまれ、疾く破りてむ。」の部分を抜き出す。

2　抜き出した箇所を読み比べ、対応関係を調べる。最初の一文は女性仮託の宣言であり、それは「自分のこと」を書くという宣言であり、「そのよし、……」の部分も同様の宣言と読めるから、「忘れがたく……」の部分と対応する。そして、そのような私的なものなので、「とまれかうまれ、……」と結ぶことになるのであろう。ただし、これは本心ではなく、従来に無い文学作品を創出するという作者の思いが込められており、そのために今に伝えられていると考えてよい。

（ゴール）この作品がひらがなで書かれていることの重要性を理解させたい。橋本氏の文章も参考にしながら、「自分のこと」、つまり私的内容を文学作品にするという意欲的作品であることに気づかせたい。

**▼ポイント▲**　冒頭部と末尾から対応している語句を抜き出して並べてみる。それらの意味するところを考えながらまとめていくとよい。

（畠山　俊）